

〈研究ノート〉

ポール・リクール「物語的自己同一性」に関するノート
—「物語」^{ナラティブ}を通して見えてくる「自己性」^{アイデンティティ}に関する考察—

荒木奈美

はじめに

高校生や大学生と卒業後の進路に関する面談をしていると、将来の選択という自分自身の目の前に差し迫った重要課題であるにも関わらず、それほど真剣に向き合っていないようにも見える態度でずるずると判断を先延ばしにしている若者に出くわす。「卒業後はどうするの?」—「まだ決めていません」「どんな仕事に就きたいの?」—「・・・」「それじゃあどんなことに興味がある?」—「特にありません」。そのようなやりとりを受けて筆者が決まって思うことは、「アイデンティティ確立」という、すでに数十年来を経て語り尽くされた感のあるこの問題だ。

小此木圭吾は『モラトリアム人間の時代』(小此木, 1978)で、自身の将来の進路選択について判断を先延ばしにする若者像をとらえ、70年代以降の青年の一典型を明示した。大人になるための自立期が軒並み高齢化し、今では境界があいまいなまま子どもから「大人」になってしまったような、幼児性の残る大人の蔓延が話題に上る時代となっている。

目の前に乗り越えるべき壁がないこと、人と争う前に対立を回避し、そのためいわゆる「通過儀礼」を経験する機会に乏しいこと。青年期にある若者たちが自分のことを知り「自立」を阻む要因は、現代においては極めて複合的であるが、将来の進路選択を前に茫洋とした自己の可能性の中で一つの道を明らかにすることにとまどい、他の選択肢を捨てて一つの方向を選び取ることの困難は、ある意味ごく人間的な行為なのではないか。ある道を選べば他の可能性は闇に葬られる。自分の選んだ道が自分にふさわしくなかったと気づいた時、自分がこれと信じたゴールが実は砂上の楼閣にすぎなかったことを改めて思い立ちすくむ。そういった後悔も、見方を変えればごく自然な成り行きなのではないか。

「割り切れない思いや情動を含んでいるからこそ人間」。そのような観点から青年期に

ある若者を見つめ直す必要を今強く感じている。自己をとらえられずもがく若者は、まだ自分の可能性に気づく前の段階にあるだけであり、それを上手に導くのが何より教師の仕事なのかもしれない。せめて彼らが情動の闇に溺れないように、その方策を示すこと。そのような発想で学生と接するとき、私たち教師にできることは、具体的にどのようなことなのだろうか。

「自己」を「解説すべきテキスト」ととらえ、徹底して「自己」とは何かを問い続けたポール・リクール (paul Ricœur)。リクールがこの「自己」に関する探究の中で行きついた一つの境地とも言える、「物語られた時間」の中で人間をとらえる視点には、それが一つの虚構の中で生の時間を生きる人間を考えるという、ある意味逆説的な行為であるがゆえに、かえって、理路整然さが求められる「物語」には回収しきれない「人間」ならではの性質が浮き彫りにされていると考えている。リクールの物語論は、ともすれば「人は物語られることで自己認識を果たす」(Ricœur1983)ばかりが独り歩きし、物語ることのカタルシスの側面がクローズアップされがちであるが、生涯をかけて「自己とは何か」「人間とは何か」を問い続けた哲学者が、そのような人間の実世界にあらわれた一面だけをとらえて論究を終えたとは思えない。むしろその先にある「アポリア」と闘う中で見えてきた問題にこそ、リクールが明らかにしようとした人間の本質が見え隠れしているのではないだろうか。そしてここにこそ、筆者自身の問題関心である、青年期にある若者の人間理解を深める鍵が隠されているのではないか。

本稿はそのような観点から、「物語的自己同一性」という、リクールが物語論に関する長い探究の果てに行きついた概念を読み直し、リクールの考える「自己性」のあり方を考察することで、いわば〈言語化しえない〉領域にある人間の側面に迫りたい。その上で青年期にある若者、ひいては人間全般の人間理解において、筆者自身が認識を改める方向を探りたい。

1 「自己」とは何か —リクール哲学全般からの考察

リクール哲学の根本にあるのは『『傷ついたコギト』の『言葉』に照らされた自己探究』とする杉村靖彦は、リクールの物語的自己同一性をめぐる論考の中で、『過ちやすき人間』から『他者のような自己自身』に至るまでのリクールの「自己」に対する解釈の深まりを的確に述べている(杉村1999)。杉村は、『悪の象徴系』における「言語は情動の光である」「告白によって、人間はかれの不条理、苦しみ、不安の経験のなかでも言葉であり続ける」

(Ricoeur1960)という主張に見られるように、リクールが早いうちから「自己の問い」の「袋小路」を逃れうるのは「言葉」であったと考えていたことを指摘している。そしてリクールのこの「情動」、心の中に抱える「不条理、苦しみ、不安」といった、言語化しえない世界を開くのは「言葉」であったという一見矛盾するような関心は、やがて言語の持つ「ポエティック」な側面への関心へと向けられていく。

杉村は、リクールがこの「ポエティック」が「たんに言語機能としての『詩的』作用ではなく、人間存在を『創り』直し、あらためてその根底から生かす言葉のあり方」を示していることを指摘している(杉村1999, p 71)。その上で「言葉のポエティックな力は、現にないものを見させる『開示』の働きに存している」とし、「悪や苦しみに囚われて身動きがとれない人間に対して、言葉のこの働きは、その囚われに切れ目を入れ、その囚われ自体をも照らし出す可能な次元を開示する」(杉村 同)とする。すなわち「言葉」は、「現にないもの」、「切れ目」のその先、言葉にならない「囚われ自体」(状態そのもの)という<言語化しえない世界>に通じる働きを持っているということを見せるものという考察である。

その上さらに杉村は、『生きた隠喩』(Ricoeur 1980)と対で書かれたという『時間と物語』(Ricoeur1983～1985)について、ここには「物語」という枠組みの中で「生は物語を求め、物語られることによって新たに生きられるという循環」が見られるものとして、これをリクール哲学の「新局面」ととらえる。「物語」という時間の中で、私たち人間は新たな生を生き直すことができること、あるいは「生きること、行為すること、受苦することの見えない奥底 *le fond opaque du vivre, de l'agir et du souffrir*」(Ricoeur1983, p83)を明るみに引き出すことが物語の役割であることを明らかにする。ここには、「物語」には「生き、行為し、受苦する人間」が描かれているものという、リクール独特のテキスト解釈の方向性がはっきりと示されている。この点において「物語られた筋」には、「直線的」ではない「謎や転変、空所をも自らの構成要素とする」構造が浮き彫りとなっている。すなわちここで物語として描かれた「人間」は、物語の中の人物である前に、時には激しく「情動」につき動かされ、「不条理、苦しみ、不安」などにもさいなまれる生身の人間が前提となっているということである。

杉村の論考を通して、リクールの関心が「傷ついたコギト」の「言葉」を介しての自己探究にあったと考えると、リクールの「自己」観と、「自己」と「言葉」とのつながりに関する意識がおぼろげながら見えてくる。リクールが人間のなかの「自己」を探るとき、そこは決して<言語化しえない>ところにある世界と結びついている。また「言葉」の使い方についても、言葉を通じて、言葉では決して表現できない世界を見出そうとしてい

る。さらに「物語」についても同様である。物語とはあくまでも虚構であり、その意味では生身の人間は前提としない世界の所産である。それをリクールは語ることによる人間の再解釈と結びつけている。あくまでもとらえきれない情動や不条理を抱えた人間を前提としているのである。

その上で、この「物語と自己探究の問題との結びつきを端的に示す概念」として杉村が提示するのは「物語的自己同一性 *identité narrative*」という概念である。物語ることによって明らかとなる自己同一性とはどのようなものか。リクール自身、この概念と出会ったのは、『時間と物語』を書き終えた後だという。またこの段階では単なる気づきにすぎなかったこの「自己」をめぐる問題について、リクールは『他者のような自己自身』(Ricœur1990) および概念定義そのものに迫った雑誌掲載論文 (Ricœur1989) において改めて論究している。次項ではこの「物語的自己同一性」が照らし出す「自己」の問題についてクローズアップして考察したい。

2 二つのアイデンティティ 「同一としての自己同一性」と「自己性としての自己同一性」

『時間と物語』の中ではじめてこの「物語的自己同一性」が取り沙汰されたとき、この「特殊な自己同一性」とされる概念は、同一 (*idem*) としての実体的で形式的な同一性とは一線を画する、「自己自身 (*soi-même*)」(*ipse*) としての同一性 (*identité*) と同義であった。それは非連続的にしかとらえきれない同一としての自己同一性をつなぎ「固有名詞の不変性を支えるもの」であり、「それは <だれ> ?」に答える自己同一性である。言い換えれば、「物語的自己同一性」とは、語ることによってはじめて見えてくる自己認識の一つの形となるのである。そもそも「物語る」行為は、バラバラになっている「出来事」を「結末」に向かって「筋立て」し、「理解可能な全体として編成」し直す作業である (Ricœur1983)。それによって、これまで明らかとなっていなかった経験の意味が明らかとなるだろう。患者がカウンセラーに導かれて、自分にとって「今まで支配的だった自己物語」を「異なる形で自己を語れるように援助する」ことで、患者の「新たな可能性を探求する」というナラティブ・セラピー (早川 2009, P.88) は、この営みを生かした治療法である。また自伝的小説などに見られる、長い物語りの果てに行きついた自己発見のカタルシスは、まさしく「物語的自己同一性」の具現化と言える。

確かに、物語行為のこの生産的な側面だけをとらえるならば、「物語的自己同一性」とは、例えば自己の中にくすぶっていた語り得ない思いを言語化して見える形に引き上げること

と同義となるだろう。入り組んだ経験を解きほぐして「筋立て」し、一つの結末に向かって語られた物語は、確実に何らかの自己「開示」につながる行為となりうる。

しかしながらこの概念には、それが生身の人間を前提とする限り、解決しがたい問題をはらんでいることも事実である。そしてその一つは「物語的自己同一性は、安定した、首尾一貫した同一性ではない」ということである。同じ出来事でも語る切り口によっていくつでも別の物語りは可能となるだろう。もちろん実際に経験していない想像的経験にもとづいた創作も可能となることを考えれば、物語ることによって見出される自己同一性の形はいくらでも出てきそうである。またその一方で、そのような中であって、どんなに言葉を尽くして語っても語り得ない「自己」が存在することにも意識的であればならないだろう。

3 「自己性」が露呈するということ

改めて「自分自身 (ipse) としての自己同一性」を「自己性 ipseité」の観点から取り上げる。『時間と物語』の中ではこの「自己性」の定義は特別に記されず、「自己性 ipseité」が「同 (Même)」と「異 (Autre)」のジレンマから逃れることができるのは、物語テキストを詩的に組み立てることによる力動的同一性 (identité dynamique) のモデルに一致した時間構造にもとづいている限りにおいて」であるとし、このとき「自己自身 (soi-même)」は「物語の統合形象化作用 (configurations narratives)」によって「再形象化 (refiguration) される」としている (Ricœur1985, P.443)。この段階では「自己性」が物語行為をもってはじめて明らかになるものであることを示唆してはいるが、それ以上の論究はなされていない。

そしてリクールは、『他者のような自己自身』の中で改めてこの問題を取り上げることとなる。序文に「私は『時間と物語Ⅲ』の結論で導入した物語的自己同一性の概念に、より深められた発展を与えること」によって「さらに一歩進めた」と述べた上で、明確に「固定した、実体的な自己同一性」である「同一 idem としての同一性」とこの「自己 ipse としての同一性」を区別し、この二つの「弁証法」が「注目すべき充実化」につながったと述べている。この段階で注目すべきは、物語ることによって見出される同一性としての「物語的自己同一性」は、ここに至って「自己 ipse としての同一性」と同義のものではなく、同一性をめぐる「同一性 mêmété」と「自己性 ipseité」という二つの同一性のアポリアを解決するための方策として提示されているということである。すなわちこれまでの議論では、「自己性」はあくまでも「物語ることによってはじめて見えてくる同一性」という

説明にとどまっております、その内容そのものについて触れられることは無かったのだが、ここに至って、「同一性」との対立概念としての「自己性」が示されたのである。

リクールは、新たな著書の中で改めて自己性を定義し、「自己の自己性」は「カントが実体のカテゴリーに与えた関係性的な意味での基体 (Substrat) の規定には還元されないような、時間における恒常性の一つの形を含意している」すなわち「単純に実体のカテゴリーの図式ではない、時間における恒常性の形を含意している」(Ricœur1990,p153)ものとするが、実際のところは「自己性」は「同一性」に包含され見えなくなっている。リクールは一例として、「習慣」あるいは「獲得された自己同定」によって「性格の恒常性」が極めて安定した、「同一性」に支えられたものとして見えてくるケースを挙げている。それでは「同一性」に規定されない、「自己性」に裏づけられた、安定した「実体」を持たない「性格の恒常性」とはどのようなものだろう。

この一面を見せてくれるのは、「物語の形態の喪失」、「物語の結びの危機」によって「自己同一性の喪失」として記述される「現代の演劇や小説」の中の事例であるという(Ricœur1990,p192)。ここにおいて「同一性の支え」を失った作中人物は物語のなかで「自己性を露呈させ」ているという。言い換えれば「物語」が破たんすることで、「自己性」が露わになるというのである。

4 志賀直哉『城の崎にて』を例にした「自己性」に関する考察

ここで振り返りたいのは、志賀直哉『城の崎にて』における筆者の考察である(荒木2012)。自己の不安感を隠べいし、表面の言述とほうらはらに不安を増幅させている作中人物を分析した内容であるが、これは言い換えれば、「物語」から漏れているという意味においてまさしく「自己性」の露呈と言うべきものではないか。

『城の崎にて』の語り手は、「山の手線の電車で跳飛ばされて怪我をした」その「後養生」のために、三週間ほどをある温泉街にて過ごす。彼は「背中の傷」が「脊椎カリエス」という当時不治の病と言われた病に発展し、やがては死に至るといふ漠たる不安を抱えて、かの地にやって来たという。

滞在中のそんなある日、語り手は「一疋の蜂が玄関の屋根で死んでいるのを見つけ」るが、「如何にも死んだものという感じを与える」この死んだ蜂を、彼は三日間、雨が降って死骸が流されるまで放置したまま眺め続けている。彼の目にはそれが「如何にも静かな感じを与え」「淋しい姿に映っている。「自分はその静かさに親しみを感じた」とも述べている。

ほどなくして語り手は、「大きな鼠」が「首の所に七寸ばかりの魚串が刺し貫して」ある姿を目の当たりにする。他の見物人が面白がって鼠に石を投げ、鼠がますますもがく姿を見ながら、「淋しい嫌な気持」になり、自分自身の「電車で跳ねられた事故の後に自分がした行動」を改めて振り返る。彼は、鼠の姿と事故当時の自分の姿を重ね、鼠が「死の恐怖」のないままに生きようとしてもがく姿を直視できないが、それがかれの「嫌な気持」へとつながっている。

物語の言説上には、その後この〈死への恐怖〉へと通じている「嫌な気持」は一切語られない。次に出会った「蝶々」のエピソードから芽生えた感興である「生き物の寂しさ」の陰に隠れ、自分が今生きていることに「感謝しなければ済まぬような」気が起こる。その上で「生きている事と死んで了っている事と」は差がない、「両極」にあるものという思いを抱きながら、この物語りは閉じられる。

言説上の物語をたどる限りにおいては、中村光夫が分析したように、この語り手は一つの感興を得て「至福の状態」にあるのかもしれない。しかしながら実際には、語り手が抱えている〈死への恐怖〉が消えたわけではない。その証拠に語り手は「自分は脊椎カリエスになるだけは助かった」と述べる。確かに脊椎カリエスになって死ぬという恐怖からは逃れられたが、「だけは」という条件がついている限り、彼がなお同様の苦しみにさいなまれているだろうことも容易に想像しうる。つまり言説には見えないところで彼は、言葉とはうらはらの別の思いにとらわれていることが読み取れるのである。それは言葉に置き換えて物語られていないために、私たち読み手に明確に示されているものではない。しかしながら明らかに「語られていない」何らかの感興は見え隠れしている。言い換えれば「露呈」している。

5 改めて「自己性」とは何か

リクールは「文学的フィクションが科学技術的フィクションと根本的に違うのは」、「演劇や小説の人物は、われわれのような人間」であることと指摘する（Ricoeur1990, P.178）。人間である限り、私たちは迷い、右往左往する。都合の悪いことは隠蔽もするし、極めて偏りのある仕方でも自己認識した内容を語ることもできる。そのようないわば「ノイズに満ちた」存在をモデルにした「文学的フィクション」が、時に上手に「物語」る行為を放棄し、わき道にそれてしまうことはあるだろう。あるいは知らず知らずのうちに矛盾した内容を「語る」こともある。『城の崎にて』の語り手のように無意識に閉じ込めてしまうケースも見られる。「物語」という枠組みでは回収しきれないものを抱えているのが人間、な

のではないか。

リクールがはじめ「自己性」を「物語的自己同一性」と同義ととらえ、その後に「同一性」と「自己性」のアポリアを解消するための概念として「物語的自己同一性」をとらえることになった背景には、リクール自身の、この矛盾に満ちた人間に対する見方への気づきがあったのではないかと考えてみる。語りの形式が破たんしている小説には、主人公の「自己性」が露呈することが証明するように、物語られることによって見えてくる「同一性」には、語っても語っても語り尽くせない自分の中の自分もまたついてくる。それもまた当の人間が抱える「同一性」に他ならない。このことに気づいた時、必然的に「自己性」と「物語的自己同一性」は切り離されることだろう。「語ることによって見えてくる」私の背景には常に「語ることによって見えなくなっているかもしれない」私もまた「開かれて」いることに自覚的でなければならない。たくさんの矛盾を抱え、それでもその中にある可能性を切り開きながら生きているのが人間だという紛れもない現実を目を向ける想像力が、少なくとも「人間」を相手に、彼らの物語られた同一性に耳を傾ける役割を果たす教師には必要でないかと考えるのである。

引用文献

- 荒木奈美「隠された物語(ナラティブ)をもとめて 志賀直哉「城の崎にて」を中心に—
青年期教育において文学教材が果たす役割について考える②—」(『札幌大学総合
論叢』34号 2012. 3)
- 早川正祐「ナラティブ・セラピーとケア—当事者の物語の重視とは何か—」(『応用倫理・
哲学論集』東京大学人文社会系研究科哲学研究室&グローバル COE (死生学の
展開と組織化) 2009. p.83-97)
- 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』(中央公論社 1978)
- Ricoeur, P. (1960) *homme faillible*. Aubier (久重忠夫訳『人間この過ちやすきもの—有限
性と有罪性』以文堂 1978)
- Ricoeur, P. (1983) *Temps et Récit I*. édition du Seuil (久米博訳『時間と物語I』新曜
社 1987)
- Ricoeur, P. (1985) *Temps et Récit III*. édition du Seuil (久米博訳『時間と物語III』新曜
社 1990)
- Ricoeur, P. (1988) "l'identité narrative. Revue internationale". *Esprit*. Juillet-août,
p295-304
- Ricoeur, P.(1990) *Soi-meme comme un autre*. Ricoeur, P. (1988) Ricoeur, P. (1988)
édition du Seuil. (久米博訳『他者のような自己自身』法政大学出版局 1990)
- 杉村靖彦「物語と自己の探求」(『フランス哲学思想研究』第4号 . 日仏哲学会 . 1999, p.68-83)